

Title	あのとき選んだ道
Author(s)	中島, 美帆
Citation	大阪大学低温センターだより. 2006, 134, p. 27-29
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/7277">https://hdl.handle.net/11094/7277</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## あのとき選んだ道

理学研究科\* 中 島 美 帆

E-mail: mnaka@shinshu-u.ac.jp

「そんなに悩むんだったらコインを投げて表裏で決めればいいんだよ。簡単だ。僕も君と同じことで迷ったとき、コインで決めただ。」ある人がこういいました。なんて無責任な。コインなんかで決められへん。「冗談じゃありません。真面目にアドバイスしてください。」しかしその人はコインを投げろ、と繰り返すばかり。ああ、こんな人に相談するんじゃなかった…

当時、私はどの道に進むべきかで悩んでいました。それまで進んで来た道が急に枝分かれしていたのです。どの道も同じように暗く、険しい道であることは分かります。いくつかの道は、あるいはすべてが行き止まりかもしれません。立ち止まって考えていても、ますます状況は悪くなるばかり。そのとき初めて人生について真剣に悩んだと思います。そして、1つの選択をしました。1年半勤めた会社を辞めて大学に戻ることにしたのです。今から5年半前、2000年の夏でした。

1999年春に阪大理学研究科の修士課程を修了してから、私はある会社に就職し、栃木県の工場に配属されました。大学での専門を生かすことのできる電子部品の素子設計の仕事で、気の合う同期や頼もしい先輩、よい上司に囲まれ充実した日々送っていました。しかし入社して1年ほど経ったとき、会社の方針転換により仕事内容が一変しました。周りの人も転勤や転職でどんどん少なくなっていく、当初はあまり危機感も感じていなかった私も、身の振り方について考えなければならぬ状況になりました。もともと私は物理学科の修士課程を出たものの、博士課程に進むほど自分は研究は好きではないと思い、一般企業への就職を選んでいました。しかし会社へ入って色々なフィールドからの人々と接するにつれ、物理学の考え方や大学での研究の大切さをますます感じるようになり、もっと勉強しておけばよかった、勉強したい、というように変化していました。会社の転換をきっかけに、大学へ戻るのも1つの選択肢として浮上してきましたが、大学を離れて1年半、博士課程でどこまでやっていけるかも自信がなく、もし博士号が取れてもその先が厳しいのは知っていました。それよりもたったの1年半なのだから、違う会社で新しくキャリアを積むのも悪くない。それに少しのあいだ我慢すれば、当時会社が説明していた通り「私の能力を生かせる仕事」が回ってくるかもしれませんでした。とにかく悩みに悩みぬき、いろんな人にも相談しましたが、結局は自分で決めなければなりません。四六時中それについて考えているので歩くときも自分の足ばかりみていたのを思い出します。そして最後に選んだ道は、慎重な性格の私としてはかなり思い切

---

\*現所属：信州大学理学部

った選択でした。とはいえ慎重なので預金通帳をにらみながら何度も電卓をたたき、とりあえずこのお金が続くまでは頑張れる、どうにもならなくなったら外国で遊んだと思ってどこにでも就職すればよい、と覚悟を決めて大学に舞い戻りました。

しかし、たった一年半ぶりの阪大豊中キャンパスはだいぶ様子が変わっていました。浸水で大騒ぎした図書館は見違えるほど立派な建物になり、郵便局まである、大学の生協も売り場がまったく変わっていて文房具を買う場所も分からない。慣れ親しんだはずの母校で右も左も分からず戸惑いました。また、研究に関する事もすっかり忘れていて、低温寒剤の取り扱いも4年生に確認してもらうほど。これでは博士課程どころか4年生からやり直さなければならない、最初のやる気はどこへやら、すぐに意気消沈してしまいました。会社生活を恋しく思う気持ちも出てきました。もともと社交的でない私は、否が応でも多くの人と付き合わなければならない会社の環境には当初とまどっていたのに、今度は反対に大学の人間関係の薄さが気にになります。会社では朝、出勤して自分の机にたどり着くまでに数え切れないほどの人と挨拶を交わし、仕事上でもどんどん新しい人と知り合いますが、大学で日々接するのは同じ研究室の人に限られています。他学科ともなれば隣の研究室でも誰がいて何をやっているのか分からない状況に、とても落ち着かない気持ちになりました。会社に入れば大学のよさに気づき、大学に戻れば会社は楽しかったと振り返る、結局私はどんな場所でも満足できず、都合が悪くなったから逃げ出しただけではないのか、と情けなくもなりました。しかしゆっくり悩んでいる暇もなく、すぐに生活時間のほとんどが実験に支配される研究生活に突入しました。こうなったらほとんどやけくそ、とにかくやらなければならないことをこなし、もがいていれば道が開けるかもしれないと考えました。そのうち他大学や、阪大の中でも基礎工の研究室に出入りさせていただき、最初に感じた人間関係の物足りなさも、研究を通して色々な人と知り合うことで解消されていきました。そしてあっという間に時が過ぎ、大学に戻ってから4年目にやっと博士号を取ることが出来ました。とりあえず当初の目的は果たせたものの、今度は落ち着く先がなかなか見つからず、極限センターや理学部で特任研究員をさせていただきながら、方々の大学の公募に応募しましたが、不採用通知が増えるばかり、生協で買った履歴書には学歴と職歴が入りきらなくなって別のものを買に行くまでに。そろそろどうにもならなくなってきた、あのとき選んだ道の先はやはり行き止まりだったのか。そんなときほど実験は失敗続きで、再び道は真っ暗になり、今度は自分が前に進んでいるのかさえ分かりません。目に映るキャンパスの風景は大学入学時の景色と重なり、結局自分はこのころから何も成長していないのだと思わせました。しかしなんとか自分を奮い立たせ、先のことは考えずに楽しく研究生活を送るように心がけ、そうこうしているうちに運良く1つの大学に採用されて研究生活を続けることが出来ることになりました。そんなわけで結局10年近くを過ごした大阪大学に別れを告げ、今年の11月から松本市にある信州大学理学部で働いています。

あのとき大学に戻ってよかったね、そういつてくださる方もいますが、それは私にも分かりません。違う道を選んでいれば、今頃もっと幸せに暮らしているかも、とパラレルワールドに思いを馳せることもあります。1つ言えることは、どの道を選んでいても私は後悔しなかつたらうということです。あのとき、真剣に自分の人生について悩んで、コインの力など借りずに決めたこと。今

ではあの悩んだ時間が私の宝です。

その無責任なコインのアドバイスをくれた人は同じ部署で働いていた大先輩で、博士号を持っておられましたが、ご自身が博士課程に進むときも、諸事情から大変悩まれたそうです。その後、私が大学に戻ることを報告すると、「コインで決めた？」とまた聞きます。この年代の男性の悪いところはしつこいところです。そんなんで決められませんって。

「そうか、コインを投げなかったのか。僕るときはね、どうしても決められなかったからコインで決めようとした。でもまさに投げる瞬間にね。」

ニヤッと笑って私のほうを見ます。

「表が出て欲しい、って強く願う自分に気がついた。表はドクターコースに行くほうだ。真実はね、僕はコインを投げようとしたが投げなかった。投げようとする瞬間に自分が本当はどちらを望んでいるかが分かる。だから君にもコインを投げてみろって言ったんだ。」

それ以来、私はなにか迷ったときには心の中でエイっとコインを投げます。表裏で決めるのではありません。その実体の無いコインがキラキラと回転して落ちてくるまでに、不思議とどちらかを選ぶことが出来るのです。

最後になりましたが、私が博士号を取ることができ、信州大学で研究が続けられることになったのも、大阪大学のたくさんの方々のおかげです。ありがとうございました。低温センター職員の皆様、特に浅井さん、古木さん、工作センターの松下さんには多大なご迷惑をおかけして、色々な失敗を許していただきました。基礎工学研究科・小林先生（現岡山大）、清水先生（現極限センター）、極限センターの金道先生（現東大物性研）、加賀山先生にも、長く色々な場面でご指導とアドバイスをいただきました。また、出身研究室である理学研究科・大貫研の杉山先生、撰待先生、稲田先生（現岡山大）、野末研の荒木先生、低温センターの竹内先生には言葉で言い尽くせないほどお世話になりました。本来ならばそのご恩を後輩の面倒を見ることでお返ししなければならぬのに、私は指導するどころか一緒に遊んだり逆に実験を助けてもらってりしてひどい先輩でした。しかし学生のみなさんのおかげで苦しいながらも今から思えば楽しい第2の学生生活を過ごすことができました。そして、低温センター長でもある大貫先生には、大学に戻ることを快く承諾していただき、研究全般のご指導はもちろん、道が見えなくて悶々としていた日々にも強く励ましていただきました。この場をお借りして皆様に厚く御礼申し上げます。